

# 「散歩」という言葉のはじまりと明治時代の散歩者たち

市村 操 一\*  
近藤 明彦\*\*

## Concept of Rambling and Ramblers in The Meiji Era.

Soichi ICHIMURA  
Akihiko KONDO

Key words : Walking (ウォーキング), Rambling (散歩), Romanticism (ロマン主義)  
Yukichi Fukuzawa (福沢諭吉), Doppo Kunikida (国木田独歩)

### Abstract

Walking is becoming popular especially amongst the people of middle age and older in these recent years. The habit of walking and rambling in Japan is very old, and new. In the medieval period, under the feudalistic social systems, common people were chained to the land of lords and were restricted from free rambling and walking across the boundary.

After the Japan's opening the country to the western world in 1860's, some novelists began to write the scenes of walking in their diary and essay. Kunikida who wrote 'Musasino' and Simazaki who wrote 'Chikumagawa no sketch' were the typical examples of those who enjoyed walking in nature. Their love of rambling and walking was influenced by the English romanticists, especially by W. Wordsworth who had practiced long walking to worship and glorify nature. While the novelists loved walking in nature, Fukuzawa, the founder of Keio University in which practical learning was stressed rather than academic science, practiced town walking every morning with his students.

The word 'Sanpo' meaning rambling was originally used by Chinese poets in the Tang Dynasty as 'Sanbu'. Japanese walkers in the Meiji era borrowed this ancient word to describe their way of seemingly idle walking.

---

\* Soichi ICHIMURA 東京成徳大学人文学部臨床心理学科 (Tokyo Seitoku University, Department of Clinical Psychology)

\*\* Akihiko KONDO 慶應義塾大学体育研究所 (Keio University, Institute of Physical Education)

ウォーキングをする人の数が増えている。正確な統計は分からないが、レジャースポーツとして、ジョギングを追い抜く勢いではないだろうか。健康のためのウォーキング、自然を観照するためのウォーキングなど、さまざまな様式の歩行が行われている (Ichimura; 1999, 市村; 2000)。

英語のウォーキングに最も近い日本語は「散歩」であろう。特に目的や到達点を意識しない歩行である。「散歩」は逍遙、散策、彷徨、踏破、跋涉などよりも、ずっと日常的に使われている言葉である。だが、これはわりに新しい日本語なのである。辞書に現れるのは明治時代である。言葉が新しいということは、同時にそのような行動や習慣も新しいことを意味している場合が多い。実際、散歩という文化が市民の間に広まるのは明治以降である。

本論文では、「散歩」という言葉の歴史を振り返り、同時にそれを実行しはじめた明治時代の散歩者の散歩を考察する。そのことは、今日ウォーキングを楽しむ人々に、楽しみの幅を広げることに貢献できるものと考えられる。

## 1、「散歩」という言葉は明治から

新村出全集 (筑摩書房) 第十三巻に「あの道この道」として収録されている新村の談話がある。

『散歩というのは、一定のプランを建てずに好きなように歩くもので、漢語から来ているね。「シヨウヨウ (逍遙)」という言葉は古く「散策」も唐までさかのぼるが、「散歩」は十二、三世紀の宋時代まで下る。日本では幕末から明治初年ごろに始まり、明治二十年に字引に初めて出てきますね』

日本国語大辞典 (小学館) には日本での初期の使用例が示されている。

### ・良寛詩-遊松之尾

「老少相卒散歩去 松林数里無塵埃」

(良寛さまと子供たちが仲良く一緒に散歩に出かける。松林が数里、澄んだ空気の中にある。市村訳) というような情景であろう。良寛 (1758-1831) は江戸後期の禅僧であり歌人である。「良寛漢詩集」がある。

### ・当世書生氣質<坪内逍遙>

「残ん (のこん) の楓葉 (もみじ) の遊覧かたがた、運動のため散歩 (サンポ) をなさん」

これは、明治18・19年 (1885・1886) に出たものであり、当時の学生風俗を写實的に描こうとした文章である。散歩にカタカナを振ってあるところを見ると、当時はモダンな風俗であったに違いない。

### ・武蔵野<国木田独歩>

「午後犬を伴ふて散歩す。林に入り黙坐す。犬眠る」

「散歩」という言葉が中国で使われるようになったのは、新村出によれば宋の時代ということであるが、実は唐の時代にも使われていた。新村の朝日新聞への談話は昭和三十一年のものであるが、二

年後に漢文学者諸橋轍次の「大漢和辞典」(大修館書店)が出版される。それを見ると、唐の詩人たちはすでに、われわれが今日使うような意味で散歩という言葉を用いていた。

韋應物は友人を偲ぶ詩の中で、  
懐君屬秋夜散歩詠涼天

(ホウアイジュン シュウチュウイェ サンブウ ユウン リヤンティエン)

(君を懐かしみ、秋の夜に誘われて散歩し、冷え冷えとした空に詩をうたう。市村訳と中国語音)と、散歩という言葉を使っている。この友人は屬(下級役人)どまりだった。

白居易(白楽天)には長安(現在の西安)の街を散歩したと思われる詩の一節がある。

晩来天气好 散歩中門前

(ワンライ ティエンチ ハオ サンブウ ジュウンメン チェン)

(夕暮れになって天気も好い、城壁の中門の前を散歩する。市村訳と中国語音)このように、唐の時代にはすでに散歩(サンブウ)という言葉と行動が存在していた。実際、唐の大詩人李白は偉大なウォーカーでもあった。李白は千以上もの詩を作っており、私たちは選者によって選ばれた詩集で李白の詩に接してきた。選者によっては「酒」や「友情」や「望郷」などをテーマとして、詩を集めて紹介する。本論文の筆者らは手分けして、李白のウォーキングの詩を探した。幸い武部利男の李白選集(1973)は李白の自然の中での散歩を多く紹介していた。

春帰終南山松龍舊隱	春に終南山松龍もとの隠居所を訪れる
我来南山陽	終南山の南に来た
事事不異昔	山は昔のままだ
却尋溪中水	振り返って谷川の水の中をのぞき
還望巖下石	崖の上から下の岩をながめたりする

このような、自然の中の歩行の楽しみを李白は数多くうたっている。その姿には、20世紀になって発展してくる「野外活動」や「レジャースポーツとしての歩行」と極めて近似した歩行の楽しみを見ることができる。だが、この楽しみが一部の詩人に限られたものであったのか、庶民も楽しんだ文化であったのか、その点については今後さらに調べてみたい。あったとしても、日本人の風習としては他の長安文化のように移入されなかったのではなかろうか。日本では西行や芭蕉や池大雅のような詩人や画家の歩行、お伊勢参りや大山詣での歩行は、中世にもあったが、庶民の散歩はほとんど知られていない(市村;2000)。

「散歩」という言葉は明治になってから使われるようになると同時に、多くの著作に散歩の様子が記述されるようになる。そのなかから、本論文では福沢諭吉、国木田独歩、島崎藤村、徳富蘆花など明治の散歩の実践者を取り上げてそのスタイルを考察する。

## 2、福沢諭吉の健康ウォーキング

福沢諭吉(1835-1901)の「福翁自伝」(1896、明治29年)は福沢62歳の年に口述筆記によって著されたものである。その「老余の半生」の章につきのような記述がある。『今でも宵は早く寝て朝早く起き、食事前に一里半ばかり芝の三光(さんこう)から麻布古川辺の野外を少年生徒と共に散歩して、午後になれば居合を抜いたり米をついたり、・・・雨が降っても雪が降っても年中一日も欠かしたことはない。』この散歩の距離はおよそ6kmであろう。福沢は「体育」の価値を重要視しており、子供の教育について『柔術体操がエラクになったとかいえば、褒美でも与えてほめてやるけれども、本をよく読むといってほめたことはない』と述べている。また、大学の教育でも身体への配慮を主張して『このままでおくならば東京大学は少年の健康屠殺場と命名してよろしい』と厳しい批判をしているが、「福翁自伝」には散歩に対する福沢の2つのとらえ方が示されている。

第一の点は運動としての「散歩」である。「歩行」が体にいいということは、江戸時代初期の貝原益軒(1630-1714)が「養生訓」の「巻第一」の中で繰り返し述べている。しかし、貝原の言う「歩行」は食後必ず数百歩行すべきであるというもので、約6km、普通に歩けば1万歩になる福沢の「散歩」とは趣が違ふ。福沢の年譜を見ると、彼は22歳のとき緒方洪庵の適塾に入門し、24歳で塾長になるが、この間に生理学や医学の原書の講読も行っている。このような教養の裏付けが、福沢に健康のための散歩を実行させたのであろう。福沢は今日広く行われている「健康ウォーキング」の草分けであると言えよう。

第二の点は、ウォーキングの中で生徒とのコミュニケーションを行っていたという点である。教育者と生徒の歩きながらの対話の伝統は、紀元前4世紀のアリストテレスの逍遙学派まで逆上るであろうが、詩人や宗教家の歩行が多くの場合単独歩行であったことと対照的である。

「父諭吉の日常」(福沢瑛一;1956)には、『…まず玄関でドラを鳴らして山の上にいる生徒を集めて、ゾロゾロと門から出かけて行く。それを見かけて町の下宿などにいる者が飛び出して来て仲間に入る。いつも来る一人が寝坊して出て来ないと、その二階の下に行って怒鳴る。そうすると、あわてて着物をひっかけ顔も洗わずに転げだしてくる奴もある …歩きながら時々おせんべいなどを袂から出してみなに食べさせた。このようにして雑談をしながらあてもなく一時間から二時間歩くのが朝の散歩でした …』という記述がある。福沢が一人で歩いたのではなく、何人かの学生をいつも引き連れていたことが伺える。『明治十年代には直接教壇に立たなくなった福沢は、このような機会を利用して学生に対して訓育を行っていた』(西川俊作;1998)との指摘から考えても、『ドラをならして…生徒を集めて』という福沢の散歩は「コミュニケーションの散歩」という側面もあわせもっているに違いない。現在のウォーキング事情をみても、一人で歩くのみならず、夫妻で、仲間と一緒に、また、何人かが集まってサークルを作って、あるいはウォークラリーのようなイベントに参加するなどしている。誰かと一緒にという点はジョギング等も含まれると思われるが、「散歩」のスピードの方がコミュニケーションにうまく同調するのであろう。

また、「書生の観た福沢先生」（小山完吾；1927）には実際に福沢と朝の散歩をした門下生の回想文として散歩の様子的一端が記述されている。そこには『… 又或時は朝書生と共に運動をして居ると往來の傍らで土方か何か湯を沸かして朝寒い時に弁当を食べている、湯気が立って居る。朝食している。そうすると先生はそれを見て「どうだえ美味そうだな」と斯う云われる。それから忽ち何月何日に広尾の広尾の狸（福沢の別荘）で朝食会をやるのではないかと提案なさる。…当時散歩の仲間は二十名位で夫等の人々を伴われて広尾の別荘に寄り込んで芝生の上で食事をする、三州味噌の豆腐汁か何かで熱いところを旨いななどと云って学生と一緒に召し上がる … 』と記されている。福沢の「コミュニケーションの散歩」の延長線上には、現在のアウトドア・クッキングの元祖といえるものまで含んでいるようである。野外活動教育における課題の一つにコミュニケーション・スキルの大切さを取り上げているが、福沢は無意識のうちにそのような活動を行っていたと考えられる。

福沢は、「福翁自伝」にウォーキングの途中に作ったとされる次のような漢詩を載せている。

一点寒鐘声遠伝	一点の寒鐘こえ遠く伝う
半輪残月影猶鮮	半鐘の残月影なおあざやかなり
草鞋竹策侵秋暁	草鞋竹策秋暁を侵し
歩自三光渡古川	歩みて三光より古川を渡る

福沢は実学者といわれており、散歩の途中で売り地を見て歩き、北里柴三郎に研究所の敷地の世話などもしているが、この詩をみると、次に述べる国木田独歩や島崎藤村らと同様、自然の中を歩くことを愛するウォーカーでもあったのである。

### 3、国木田独歩の「武蔵野」における散歩、自然の観照、そして瞑想

福沢とほぼ同世代の作家で、散歩を作品の題材とし、自身でもよく歩いた作家に国木田独歩（1871-1908）と島崎藤村（1872-1943）がいる。

ここで、独歩の「武蔵野」と藤村の「千曲川のスケッチ」の中にみられる散歩の様子を振り返ってみたい。

「武蔵野」は明治34年（1901）の発行である。独歩は東京の渋谷村に住んでいた29年の秋の初めから春の初めまでの武蔵野の散歩の日記をもとに作品にまとめあげた。作品の中には9月7日から、翌年3月21日までの22日分の散歩の日記が示されているが、その日記の一部を示したい。

十月二十五日---『朝まだき霧の晴れぬ間に家を出て野を歩み林を訪う』

同二十六日-----『午後林を訪う。林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、黙想す』

十一月十八日---『月を踏んで散歩す、青煙地をはい月光林に碎く』

同十九日-----『天晴れ、風清く、露冷ややかなり。満目黄葉の中緑樹を雑ゆ、小鳥梢に囀ず。一  
路人影なし。独り歩み黙思口吟し、足にまかせて近郊をめぐる』

同二十七日-----『昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ、日うららかに昇りぬ。屋後の丘に立ちて望め  
ば富士山真白に連山のうえにそびゆ』

独歩の散歩はほとんどの場合一人歩きであった。その歩行のなかで、独歩は自然の鑑賞と黙想を行う。このような散歩の態度は西行にも芭蕉にも見られるものであるが、独歩に武蔵野の自然を描こうという気にさせたのは、ロシアの社会心理小説を書いたツルゲ・ネフであった。ツルゲ・ネフは社会問題を小説にしたが、その自然描写は「獵人日記」にみられるように、ロマン主義の影響を受けた情趣豊かなものである。独歩はツルゲ・ネフを引用した後に、つぎのように記している。

『元来日本人はこれまで檜（なら）の類の落葉林の美をあまり知らなかったようである。林といえ  
ばおもに松林のみが文学美術の上に認められていて、歌にも檜林の奥で時雨を聞くというようなことは見当たらない』

『自分がかかる落葉林の趣を解するようになったのは（ツルゲ・ネフ）の微妙な叙景の筆の力が多  
い』と書いている。

現在われわれが持っている美的感覚も、自然に育ってきたものに加えて、われわれが生きている文化の中で学びとった部分も大きいのである。学ぶ対象になる「美的感覚」は、その社会の文化の先人によって発見されたものであったり、創造されたものである。「松竹梅」と「桜花と紅葉」だけでなく落葉樹の檜（なら）やくぬぎなどの雑木に「美」を感じる感覚は、日本人にとって新しい感覚であり、「ヨーロッパ・ロマン主義」—「ロシア文学」—「独歩」—「私たち」というような経路を通して学ばれてきたところがある。このように一つの新しい「感覚」「感性」が一つの社会の多数の人に共通して所有されるように過程を通して、私の「感覚」や「感情」は「社会化」されていくのである。

この「社会化」の過程は「散歩」という一見なんの役にも立ちそうにない無為の歩行を、社会が認め、受け入れていく過程においてもみられる。なんの目的もない歩行が怪しげな行動とみられなくなるまでには、散歩を「かっこよく」やって見せる誰かがいて、その「かっこよさ」を認め、支持する大勢の人がいなければならない。独歩が（今の中央線の）境の駅から北に歩いて行くと茶店があった。暑い夏の日であった。

『この茶店の婆さんが自分に向かって、「今時分、何しに来ただァ」と問うたことがあった。「散歩に来たのよ、ただ遊びに来たのだ」と答えると、婆さんも笑って、それもばかにしたような笑いかたで、「桜は春咲くこと知らねえだね」と言った。そこで自分は夏の郊外の散歩のどんなにおもしろいかを婆さんの耳にもわかるように話して見たがむだであった。東京の人はのんきだという一語で消されてしまった』

この婆さんがいま生きていたら「お散歩ですか。どうぞ休んでいって下さい」と愛想よく、散歩する人を迎えるであろう。散歩という行動が、福沢や独歩や、つぎに述べる藤村らによって「開発」さ



れ、その支持者と追従者によって一つの文化として定着してきたのではないだろうか。この「開発者」－「支持者」－「追従者」－「一般化」という図式はわれわれの「野外＝アウトドア」という思想にもみられる。18世紀の後半、ジャン＝ジャック・ルソーは「エミール」(1762)の中で子供を自然の中で自由に教育することを主張した。自然の持つ教育力を認めたのである。この主張は無神論ではないが、当時のカトリックの正統的な教義とは対立した。その結果「エミール」は禁書となり、ルソーもフランスを追われることになる。アメリカではヘンリー・D・ソローが、物質文明と消費社会から離れウォールデン池畔の森の中で自活と読書と思索と自然観察の生活を始める(1845)。散歩もする。このような生活は、今日のわれわれにとっては、すでに異様な生活にはみえない。むしろ理想の一つでさえある。このような「開発者」の思想や試みが、現代のわれわれの野外に対する感性にもつながってきている。

福沢も独歩も明治の中期に「散歩」という言葉を使っている。散歩はぶらぶら歩くことだが、辞書によれば「目的地を定めずにぶらぶら歩く」ことのようなのである。「武蔵野」の中につぎのような一文がある。

『されば君もし、一の小経を往(ゆ)き、たちまち三条に分かるるところに出たなら困るに及ばない、君の杖を立ててその倒れた方に往きたまえ』

『武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へゆけば必ずそこに見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある』

このような歩き方が散歩の真髄なのであろう。

#### 4、トレッキング愛好家としての島崎藤村

島崎藤村が「千曲川のスケッチ」を発表したのは大正元年(1912)である。藤村は明治32年(1898)から七年間、信州小諸に中等学校の英語の教師として暮らした。この作品は、当地の自然と人々の生活を足で訪ねて歩いた記録である。この歩行のなかには、近距離のいわゆる散歩(stroll)からハイキング、こんにちのウォーキングや、もっと厳しいトレッキングまでのさまざまな歩行がみられる。藤村の歩行の様子を紹介し、なぜ歩行でなければならなかったのかを考えてみたい。

『・・・、私は二三の同僚と一緒に、御牧ヶ原の方へ山遊びに出掛けた。松林の間などを獵師のように歩いて、小松の多い岡の上では大分蕨(わらび)を採った。』と「千曲川のスケッチ」は始まる。これは、ハイキングであろう。

散歩の途中で、藤村は『つやけの無い茶色な髪娘』によく逢う。そして学校の小使いから『小さな御百姓なんつものは、春秋働いて、冬に成ればそれを食うだけのものでごわす。まるで鉄砲虫・食っては抜け、食っては抜け』という言葉聞く。自然の観察とその中で生きる人々の実態を描く、ツルゲーネフの「獵人日記」の世界を、藤村は小諸を舞台に書いていく。

『君、白い鈴のように垂下がった可憐な草花の一面に咲いた初夏の光に満ちた岡の上を想像したま

え。・・・まるで花の臥床（しとね）だ。谷の百合は一名を君影草（きみかげそう）とも言って、「幸福の帰来」を意味するなど、花好きなB君が話した。』と言うような、近距離からの自然美の観察、そしてロマンチックな表現が随所に現れてくる。この歩行はハイキング、あるいはピクニックであろう。

藤村のウォーカーとしての面目が現れるのは後半の「松林の奥」以後の項である。

『静かな松林の中にある一筋の細道・・・それを分けて上がると、浅間の山々が暗い紫色に見えるばかり、松葉の落ち敷いた土を踏んで行っても足音もしなかった。・・・

一つの松林を通過して、また他の松林の中へ入った。・・・

勇気を鼓して進もうとすると、疲れた足の指先は石につまずいて痛い。またぐったりと倒れるように、草の上に横に成って休んだ。』

これは、浅間山の麓から、中腹の山小屋へ登って行くときの情景であるが、ここまで歩くと、もう独歩の優雅な武蔵野の散歩を越えている。藤村自身は、この歩行を「山野を跋涉（ばっしょう）する」と書いている。これは散歩でもなく登山でもない、まさにいまわれわれが言うところの「トレッキング」であり「ウォーキング」であろう。ただし、藤村が長距離を歩いたといっても、そこには「ガンバリズム」とか「克服と達成」といった思想はない。自然のなかに身を浸らす、あるいはさらす歩行と言えるであろう。

藤村の小諸での散歩は、彼の詩の中にも現れている。

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ

・・・・・・・・

暮れ行けば浅間も見えず

歌哀し佐久の草笛

千曲川いざよう波の

岸近き宿にのぼりつ

濁り酒濁れる飲みて

草枕しばしなくさむ

この「千曲川旅情の歌」の「遊子（ゆうし）」は旅人の意味である。この旅人は藤村が見た徒歩旅行者というよりは、彼自身をさしているであろう。この詩を歌った藤村の視線は、小諸城址から下りはじめ、下の盆地の中央を西に流れる千曲川に向かって移動する。川のほとりに着いたときにはもう雲の白い輝きはない。振り返ると暮色のなかに浅間の姿は認めることはできなくなっている。この詩は一か所に留まって作られた詩ではないであろう。藤村は早春の夕暮れの自然のなかに身を浸らせて歩いていたに違いない。時代はずっと逆上るが、新古今集の「見わたせば花も紅葉もなかりけり 浦



の「苦屋の秋の夕暮」と詠んだ藤原定家の自然を観察する視線は、自然の中を歩いている詩人のそれではない。定点観測的である。風光明媚な場所へ牛車（ぎっしゃ）でかけて、その場所の印象をうたったように響く。

国木田独歩と島崎藤村の自然の観察と観照は、定点観察によるものではなく、自分の足で歩き、自然に身をさらして、自然を体全体で感じ取ろうとする姿勢がある。自然への接し方という点から見ると、藤原定家は遠い。

## 5、自然を歩いて、文章でスケッチした徳富蘆花

徳富蘆花（1868－1927）は文章で自然を描いた。蘆花は1898年の元旦から大晦日まで、一日も欠かさずに自然の見聞を書きつづけた。その記録は「自然と人生」（岩波文庫）のなかにまとめられている。彼が自然を描こうとした動機は、国木田独歩に「自然の日記を書いてみたら面白いだろう」とすすめられてことにあるようである。

「自然と人生」のなかの「雑木林」の項は、確かに独歩の「武蔵野」をモデルにしたものである。しかし、蘆花の漢語を多用した美文調と、パレットをひっくり返したような色彩描写の過剰は、独歩の文章の芯のある気品にはおよばない。「春の悲哀」の項に見られる歩行の様子を引用したい。

『野を歩み、霞める空を仰ぎ、草の香を聞き、緩やかなる流水の歌を聴き、撫ぶるが如き風に向かうが中に、忽ち堪え難きなつかしき感の起こり来るあり。捉えんとすれば、すでに痕なし。……自然は春においてまさしく慈母なり。人は自然と融け合い、自然の懷に抱かれて、限りある人生を哀しみ、限りなき永遠を慕う』

この文章を文学的に高く評価するかどうかは意見の分かれるところであろう。美文ではあるが、新しい感性や、人と自然の関係についての独創的な発見はない、という評価もあろう。文学史の流れのなかでは凡庸なのである。蘆花のこの文章の背後には唐詩選や古今集や新古今集や芭蕉が厳然とそびえている。しかし、近代の日本人はこのような文章によって自然を感じ取る感性を育ててきたことも確かなのである。

いま、教育、特に野外教育の課題の一つとして取り上げなければならないことは、子供の「自然」や「景観」を鑑賞する能力を育てることであろう。最近新聞で紹介された子供の生活に関する調査によると、日の出や日没を見たことのない子供が大変多くなっている。大人のなかにも、なぜそんなことが調査の対象となるのか理解できない人もいる。われわれは経済発展のなかで、自然や景観をゆっくり観察する習慣と能力を失ってきた。そのようなことに無関心な人々の住む場所の自然は汚染され、景観は破壊されてきたのである。自然や景観の犠牲の上に、われわれは経済的な豊さを手に入れたと言ってよい。そして自動車で移動するスピードのなかでしか、自然を見なくなった。自然や景観への関心を高めることなくしては、豊さを感じることでできる将来はわれわれに残されていない。野外教育の場で子供のそのような関心を高める方法の一つは、自然の中を歩かせ、歩くスピードで、身近に

自然を観察させることであろう。「自然と人生」の「山百合」の項に、『山に登りて花を訪へば、花は茅萱深き中に潜みて、容易に見難し』という描写がある。この裏には芭蕉の句『よく見れば ならずな花さく 垣根かな』があったかもしれないが、いずれも歩いた人にしか発見できない自然への驚きと愛が感じられる。

## 6、散歩好きなヨーロッパ・ロマン主義者の影響

このような芸術家の自然のなかの歩行の伝統は、一八世紀後半から西欧に起こってくる「ロマン主義」と結びついてきたようである。ウィーンではベートーヴェンが郊外の森や谷を歩き回り、パリではジャン＝ジャック・ルソーがセヌのほとりやブローニュの森を歩き、英国のレイクディストリクトでは詩人のウィリアム・ワーズワスが1日に30キロもの距離を歩いていた。ロマン主義と自然、そして散歩の関係はここでは他書にゆずるが（シェンク；1975，市村；2000）、自然に対する憧憬がロマン主義者に共通する一つのモチーフ（題材）であった。そのためには、自分の足で歩いて自然を見る、しかも近距離で見ることが必要であったのであろう。かれらは、視覚でとらえた自然ではなく、心でとらえた自然、聴覚で聞いた自然ではなく、心の耳で聴いた自然の音を作品制作の動機としていた。

独歩は「武蔵野」のなかでは、自然の鑑賞と記述の方法をツルゲーネフに学んだと告白している。が、ツルゲーネフ以上に独歩に影響を与えたのは、偉大なるウォーカー、ワーズワースであった。明治41年の「早稲田文学」に寄せた小論「不可思議なる大自然（ワーズワースの自然主義と余）」で独歩はつぎのように述べている。『（余の作風の）其本源は何であるかと自問して、余はワーズワースに想到したのである』既にワーズワース信者である限り、余は自然を離れてたゞ世間の人間を思うことは出来なかった』そして「武蔵野」の六節の終わりにワーズワースを引用している。岩波文庫判には解説がないが、これは「泉」（The Fountain）のなかの一節『心よい水の調べに合わせて、古い辺境の歌、夏の真昼にふさわしい、輪唱歌でも歌いましょうか』である。ここでの「辺境の歌」は、原文ではBorder songとBが大文字になっている。ボーダーはスコットランドがイングランドに接する地方（一つのシャイアー）の固有名詞である。北イングランドに住んでいたワーズワースは、この地方へも徒歩旅行をしていた。

藤村も英文学を学び英国のロマン主義の影響を直接に、またロシア文学を通して間接にも受けていた。ワーズワースや、その仲間である思想家のラスキンの影響を受けている。「落梅集」の中の「雲」は、自然の中を歩いて雲の観察を続けたラスキンの文章がもとになっている。

蘆花は「自然と人生」の前書きにワーズワースを英語のまま引用している。これは「ティンターン修道院上流数マイルの地で」という叙情詩の88-95行目である。山内による訳詩はつぎのようである。『わたしは自然を無分別な若者の頃とは違う目で見るとを学んだ。しばしばわたしが聞いたのは、人の奏であるあの静かで物悲しい音楽。それは耳障りでも不協和でもなく、心を鎮め和らげてくれる力

に満ちていた』

日本が明治の開国で欧米に扉を開いたとき、繁栄を誇っていた英国では、ワーズワースやコールリッジによって端初を開かれたイギリス・ロマン主義が咲き誇っていた。明治の文学者たちはその影響を受けずにはおられなかったのであろう。しかし、英国のロマン主義は、産業革命の中での自然回帰を求め、行き過ぎた理知主義に対して人の感性の尊重を主張し、硬直した形式的古典主義に対して自由な表現を求める、反逆の、あるいは戦うロマン主義であった。センチメンタリズムや現実逃避のロマン主義ではなかった。

近代のウォーキングの歴史は、これらのイギリス・ロマン主義者によって始められたと考えてよい。それが、明治の文学者たちによってわが国に移入され、新しい習慣となって広まっていったと考えられる。われわれは自然の中を歩くという点では、ウィリアム・ワーズワースの末裔である。役小角（えんのおずね）や空海の遠い記憶を集会的無意識に持った、イギリス・ロマン主義のグッド・スチューデントと言ってもよいであろう。ウォーキングは身体の運動だけではなく、精神が深く係わった文化であった。

## 7、まとめ—明治の散歩実践者から野外教育がなにを学ぶか

これまで、述べてきた、福沢諭吉、国木田独歩、島崎藤村、徳富蘆花ら明治期の散歩実践者はそれぞれ違ったタイプの散歩を行ってきている。それぞれを比較すると、

福沢諭吉 … 実利的な健康のための散歩、コミュニケーションの散歩の実践者

国木田独歩 … 自然の鑑賞と瞑想の散歩の実践者

島崎藤村 … 自然と人の生活の観察のための散歩の実践者

徳富蘆花 … 自然の鑑賞が主で散歩の楽しみは従となっている、文章で自然をスケッチした散歩の実践者。

という特徴が認められる。

現代のウォーキングはもはやブームといえるほど盛んに行われている。しかし、現状は身体的健康面の問題を指向しており、ある意味では強制的・脅迫的な面が強調されすぎているのではないだろうか？ 筆者らは、「散歩」を継続的に実践するためには、「散歩」が人々の内面とどのような関わりを持つかを良く知ることが必要であると考えている。

以上、明治期の散歩実践者を概観して分かったようにウォーキング＝「散歩」には、さまざまな側面が含まれている。決して身体的健康面だけを強調したものではない。明治期のウォーキングの先人たちが我々に教えてくれたのは「ウォーキング」の効用の、精神面をも含んだ全人的な側面への効用ではないだろうか？

ハイキング（川端康成の「雪国」に初出、昭和10年）のブームは、日本の重工業の発展にともなう「山の手」「郊外」の形成と平行するが、このことについては別の機会に論じたい。

引用・参考文献

- Ichimura, S. (1999) Walking: Its history and traditions. The Hong Kong Journal of Sports Medicine and Sports Science, 9, 44-48.
- 市村操一 (2000) 誰も知らなかった英国流ウォーキングの秘密 山と溪谷社
- Else, D. (1997) Walking in Britain. Lonely Planet
- 貝原益軒 (1961) 養生訓・和俗童子訓 岩波文庫 24-43
- 清岡瑛一 (1956) 父諭吉の日常 三田評論 10月号
- 国木田独歩 (1939) 武蔵野 岩波文庫 7, 22
- 国木田独歩 (1980) 武蔵野 日本近代文学体系国木田独歩集 角川書店
- 国木田独歩 (1908) 不思議なる大自然 (ワーズワースの自然主義と余) 早稲田文学 27号 (国木田独歩集 筑摩書房 昭和49年刊に収録)
- 小山完吾 (1927) 書生の観た福沢先生 三田評論 7月号
- 島崎藤村 (1955) 千曲川のスケッチ 新潮文庫 87-89
- シュenk (生松・塚本訳) (1975) ロマン主義の精神 みすず書房
- 白洲正子 (1996) 西行 新潮文庫
- ソロー (佐渡谷訳) (1991) 森の生活-ウォールデン- 講談社学術文庫
- 高橋哲雄 (1996) イギリス歴史の旅 朝日新聞社
- 武部利男 (1973) 李白 (中国詩文選14) 筑摩書房 90
- 田部重治訳 (1938) ワーズワース詩集 岩波文庫
- ツルゲーネフ (佐々木訳) (1958) 獵人日記 岩波文庫
- Davies, W. (1975) William Wordsworth Selected Poems. Everyman's Library.
- 徳富蘆花 (1933) 自然と人生 岩波文庫 67
- 永田龍太郎 (1998) 『この道や・・・』 -西行そして芭蕉・蕪村・一茶- 永田書房
- 西川俊作・西澤直子 (1998) ふだん着の福沢諭吉 慶応義塾大学出版会 205-209
- 福沢諭吉 (1971) 福翁自伝 講談社文庫 258-298
- 安田章生 (1993) 西行 弥生書房
- 山内久明編 (1998) 対訳ワーズワース詩集 岩波文庫 53
- ルソー (今野訳) (1955) エミール 岩波文庫
- ルソー (今野訳) (1960) 孤独な散歩者の夢想 岩波文庫 22